

# 令和2年度 研究集録

## 研究主題

主体的に学びに向かう児童を育む授業改善  
～「問い」と「対話」を重視した授業づくりを通して～



岩国市立愛宕小学校

## はじめに

人工知能やA Iなどの技術革新が急速に進展し、私たちの生活の中では、こうした言葉が当たり前のように使われるようになりました。ほんの2、3年前、これだけの勢いで生活の中に取り入れられていくことを誰が予測したのでしょうか。人工知能やA Iは顕著な例ではありますが、これからの予測困難な時代にあつて、未来を生きる子どもたちは、自ら課題を求め、自ら学び、自ら考え、自ら判断して行動し、よりよい社会や自らの人生を切り開いていかななくてはなりません。そうした背景もあり、小学校では本年度から新しい学習指導要領が完全実施となりました。

しかし、新型コロナウイルス感染症の脅威により、本年度、子どもたちは「学校に行きたくても行けない」「友だちと遊びたいのに会えない」といった不安から学校生活をスタートすることとなったのです。また、私たち教職に携わる者にとっても、当たり前のようにあるはずの学校がないという経験は、大きな不安でもありました。

そして、学校再開。

私たちは、子どもたちに何を求めていくのか……。

その答えは、学校に来るようになった子どもたちの姿にありました。久しぶりに再会し、会話を楽しむ姿。3密に気を遣いながらも楽しそうに遊ぶ姿。そして、静かに集中して学習する姿。

子どもたちは、学校を求めていたのです。

子どもたちが本来もっているこうした意欲を引き出すために、私たちは昨年度まで実践してきた社会科における研究成果を活かすこととしました。それは、「問い」と「対話」です。社会科だけではなく、各教科等においても「問い」と「対話」を重視することで、新しい学習指導要領で言えば「主体的、対話的で深い学び」を実現していこうと考えたのです。

また、川下中学校区では、「岩国市小中一貫教育に係る確かな学力推進研究事業」を受け、これまで築いてきたコミュニティ・スクール及び地域協育ネット（「あったかネット」）の仕組みを生かした取組を進めているところです。そうした中、本校の研修内容が、授業における小中一貫教育の取組にも生かされるよう検討してきました。まだまだ十分な成果とは言えませんが、川下中学校区の子どもたちのために、川下小学校、川下中学校の先生方と交流しながら研修を進めることができたことは、私たちにとって大きな財産となりました。

終わりになりましたが、中間発表大会の際の指導助言だけでなく、日々の授業づくりに対しても熱心にご指導いただいた岩国市立岩国小学校 教頭 中重利紀 様、学校組織の在り方についても指導助言をいただいた岩国市教育委員会のみなさまに厚くお礼申し上げます。

2021年（令和3年）3月

岩国市立愛宕小学校 校長 原 田 剛

# 目次

○はじめに

○目次

I 研究概要

II 授業研究の記録

低学年 実践・考察

中学年 実践・考察

高学年 実践・考察

○おわりに

# I 研究概要

## 令和2年度 校内研修について | 小中一貫教育研究事業を受けて

### 研究主題（小中一貫）

他者との関わりに喜びを感じ、主体的に学びに向かう児童生徒の育成  
～地域連携を基盤とした「知・徳・体の部会」の有機的な連携・協働を通して～

### 研究主題（校内研修）

主体的に学びに向かう児童を育む授業改善  
～「問い」と「対話」を重視した授業づくりを通して～

### 主題設定の理由

#### 小中一貫教育として

岩国市では今年度より、全ての小中学校において小中一貫教育がスタートする。そこでは、「意識したい5つのつながり」として、「目標をつなぐ」「カリキュラムをつなぐ」「子供の心をつなぐ」「教職員の意識をつなぐ」「家庭・地域との絆をつなぐ」が挙げられている。中1ギャップ及び10歳の壁を克服し、9年間を見通した学びの連続性ある教育活動・各中学校区の特徴を生かした取組が推進されるのである。

川下中学校区では、これまでに共通目標を「地域を愛し、知・徳・体の調和がとれ、夢や志をもつ子ども」の育成」と設定し、取組を行ってきた。知の部会においては、「算数・数学」「外国語活動・英語」「学習力」を柱に小学校入学から4年後・7年後・9年後の姿を明示し、ゴールイメージを共有してきた。本年度から、岩国市小中一貫教育に係る確かな学力推進研究事業の研修指定を受け、上記の研究主題を設定した。小中一貫のカリキュラム実践を行うことや、学力を知的偏重にとらえるのではなく、「知・徳・体」の3つの視点から「学力」を定義づけ、バランスのよい「学力」を身に付けることを目指すことで、児童生徒の主体性や学力を伸ばしていけるのではないかという仮説を立てて検証を進めていく予定である。本校においても児童の実態を踏まえつつ、川下中学校区で取り組む研究に協働的に取り組み研修を進める必要がある。

#### 本校の課題から

12月末に行った本校職員へのアンケートでは、本校児童の「学習意欲の向上を目指したい」「学習意欲に課題がある」という回答と、「授業を通してコミュニケーション能力の向上を図りたい」という回答が半数以上を占めていた。実際に、授業開始から投げやりな態度の児童や、課題に向かおうとしない児童、受け身がちで、黙々とただ黒板を写すだけの児童がよく見受けられる。では、学習意欲が向上した姿とは、授業においてコミュニケーションを活発に図っている姿とは、どのような姿なのであろうか。まさしく主体的に学習に取り組む児童の姿であり、学び合いの中で高まる児童の姿である。これらの姿は全ての学習の基盤となるものであり、学習に向かうエネルギーとなるものである。このような児童の姿なくして、川下中学校区の研修主題にある「主体的に学びに向かう児童生徒の育成」には、たどり着くことはないであろう。

## 新学習指導要領との関連から

令和2年度より「新学習指導要領」の全面実施となる。ここでは、育成すべき資質・能力が3つの柱で整理され、「何ができるようになるか」が明確になった。

中でも、「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、『中央教育審議会「児童生徒の学習評価の在り方について」(報告)2019. 1』では、以下のように示している。

- ①「粘り強い取組を行おうとする側面」
- ②「自らの学習を調整しようとしている側面」

(自らの学習状況を把握し学習の進め方について試行錯誤するなど)の両面を評価する。これらは言うまでもなく本校の課題で、意識的に育てなければならない資質・能力である。

また、「何ができるようになるか」だけではなく、「どのように学ぶか」も授業改善の視点として大切である。各教科の見方・考え方を単元内において十分に働かせ、主体的・対話的で深い学びを目指す必要がある。(深い学び=教科目標の実現)

つまり、本校児童の課題である「主体的に学習に向かう態度の育成」は、児童の実態に沿った課題解決であり、川下中学校区で目指す子供の姿を求めるために必要不可欠なものであり、新学習指導要領に示された深い学び(=教科目標の実現)に大きく関わるものと言える。

### 「主体的に学習に取り組む児童」とは(本校のめざす児童の姿)

- ・自ら「問い」をもち、課題設定を行い、課題追究する児童
- ・友達の考えと自分の意見を比較し、自分の考えを深めたり、広げたりする児童
- ・自分の学んだ内容や学び方を振り返り、次時に生かそうとする児童

### 本校の研究の視点 「問い」と「対話」を重視した授業展開

子供が主体的に学習に取り組む、必然性のある対話を通して学習していくためには、「問い」が重要となる。しかし、「問い」は本来、子供の中から出てくるものである。そこで、学習展開の導入部にあっては、子供にとってのずれや驚き・意外性を表出させる手立てを教師が仕掛けることで、子供の既有知識とのギャップから問いを引き出していく。この「問い」の考えるべき課題を焦点化させて見出された「学習課題」を示すことができれば、単に教師や教科書が一方的に示す課題以上に、子供が主体的に学びを進めたり、必然性のある対話をしたりしながら学習していくことが期待される。

「問い」から見出された「学習課題」を受け、展開部においては、「対話」を取り入れた活動を行っていく。ここでいう対話とは、単に友達との相談・話し合いだけに留まるのではなく、教材とじっくりと向き合う活動、自分自身の考えと向き合う活動を包含したものである。対話を行うことで、より子供は主体的に学びを進め、友達との協働や、自己と外界との相互作用を通して自らの考えを広げ深めることができるようになる。この対話を必然性のあるものとするために、「自分の考えを書く」「立場を決める」「1人では解決できそうにない課題に向かい合う」といった活動を設定する。また、授業においては、課題追究の途中に、視点を切り替えたり、学びをより深めたりするための「発問」も欠かせない。この「発問」を展開部に意図的に設定していくことで対話がより活性化され、子供の学びが加速し、本質(主眼の達成)へと導かれていくのである。

終末部では、個の学びを再構成したり、広げたりする「振り返り」の設定を行う。深い学びは、一単位時間で得られるものではない。しかし、毎時間の学習内容を個々が再構成したり、学びを基に新たな展望へと広げたりする「発問」による学習の振り返りを設定することで、その積み重ねが、単元末の深い学び

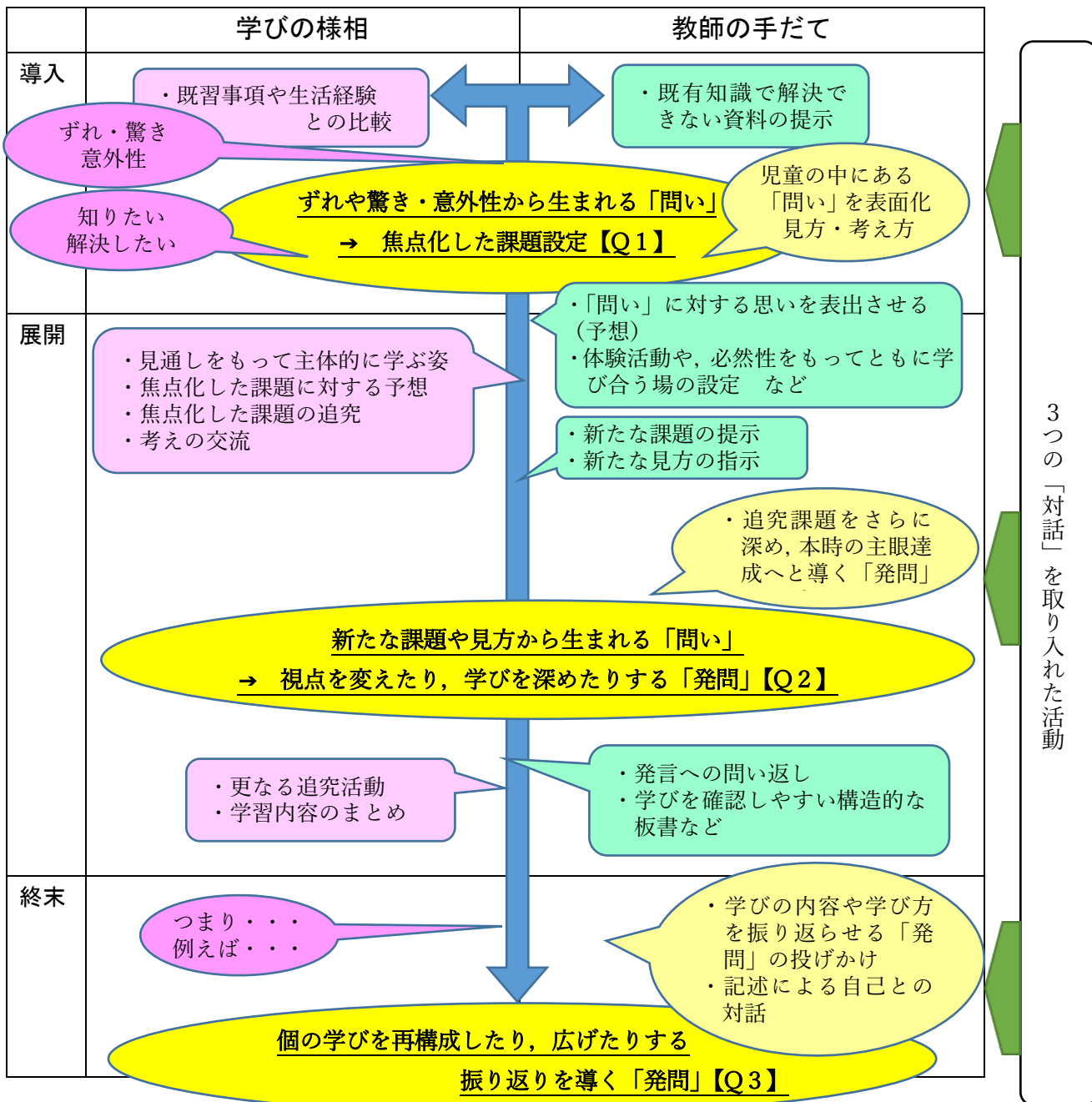
を導く考える。また、学びの内容とともに、学び方を振り返らせることで、子供は自分の学習状況をメタ認知することができるであろう。その際、本校では必ず「書く活動」を設定する。「書く活動」の中で子供は自分自身との対話を行い、自身の学びを自覚していくのである。

**「問い」の構造化**  
 ※発問も児童の疑問も全て「問い」とする。

**「対話」の位置付け**  
 ※構造化された「問い」との関連

- ・児童の「問い」を基に課題設定を行う
- ・視点を切り替えたり、深めたりする「問い」を教師が発する
- ・学んだ内容や学び方を振り返ることができる「問い」を教師が発する
- ・教材と「対話」できる時間を確保する（教材と一人で向き合う）
- ・友達と「対話」できる時間を確保する（他者の考えと向き合う）
- ・自分と「対話」できる時間を確保する（**書く活動**で自分の考えと向き合う）

**「問い」と「対話」を重視した授業展開のイメージ**



## II 授業研究の記録



# 低学年 実践・考察

## 第1学年3組 算数科学習指導案

### 1 単元 たしざん(2)

### 2 単元の目標

(1位数) + (1位数) について、繰り上がりのある場合の計算の仕方を考えることを通して、計算が確実にできるようにするとともに、よさや楽しさを感じながら学ぶ態度を養う。

### 3 単元の構想

○ 本学級の児童は、元気いっぱい、算数科の学習においても積極的に発表したり、自分の考えを全体に伝えたりと意欲的に学習に取り組んでいる。しかし一方で、なかなか学習に集中して取り組めない児童や、一人で問題に取り組むことが苦手な児童、学習内容の理解にかなり時間がかかる児童もいるなど個人差もあり、常に声かけや個別に支援が必要な児童もいる。

1学期には、繰り上がりのないたしざんを学習している。数図ブロックを使ったり、繰り返し練習したりする中で、ほとんどの児童が正確に答えることができているが、まだ指をつかいながら数えたしで計算している児童も数名いる。10までの数の合成・分解については、数図ブロックでの操作をしながら答えることはできるが、半数の子がブロックなしではスムーズに答えることが難しく、定着していない。繰り上がりのあるたし算の学習では必要となる技能なので、本単元に入る前に定着させる必要があると感じる。

○ 本単元は、学習指導要領、第1学年2内容A「数と計算」(2)に示された指導事項のうち、1位数と1位数の繰り上がりのある加法を指導するために設定されたものである。1位数の加法については、「⑥ たしざん(1)」において(1位数) + (1位数) = (10以下の数)の学習をしてきている。本単元では、和が10より大きくなる1位数の加法を学習する。数図ブロックや指などを用いて「数えたし」を行えば十分解決できる計算ではあるが、より⑧やく・⑨んたん・⑩いかくに解くためには、「10をつくる」ことが大切である。児童は、これまでに数の分解、10といくつで「十いくつ」という捉え方、3つの数の計算で学習した $9 + 1 + 3$ のような、初めの2つの数の合計が10になる計算など、繰り上がりのあるたし算に必要な要素を学習してきている。これらの既習内容をいかして、まず数図ブロックを操作することにより計算方法を理解し、最終的に念頭操作によって計算できるようにする。

○ そこで、指導に当たっては、以下の点を留意する。

- ・ 毎時の終末に練習問題を行うことで、本時の学びを確かなものとするとともに、自信につなげていき、さらに「学びたい」という気持ちを高めていく。
- ・ 毎時の終末に、簡単な記号による振り返り(わたがし)で自己評価を行い、学習内容の理解度を確認する。

#### 視点1 「問い」との関わり

- ・ 情景図と問題文から立式し、既習事項との違いに気づかせ、どうやって計算するのかを数図ブロックを使って考えさせる。(Q1)
- ・ 既習事項を思い出させ、10のまとまりを作ることがより早く・簡単・正確に答えを導き出せることに着目させる。(Q2)

### 視点2「対話」との関わり

- ・10の補数に着目させやすい数図ブロック盤を使い、実際に数図ブロックを操作し、10の補数を利用して答えが求めやすいことに気づかせ、計算の仕方を理解させる。(教)
- ・ペア学習やグループ学習を取り入れ、発言・交流の場を設定することで、児童一人ひとりが自分の考えを伝える力を付けるとともに、友だちの意見と比較したり、関連付けたりしながら、自分の考えを広げ、深めることができるようにする。(友)
- ・様々な計算ゲームで遊ぶ活動を通し、楽しみながら計算方法の習熟を図る。(教)

## 4 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○ 繰り上がりのある計算の仕方について理解し、(1位数)+(1位数)の繰り上がりのある計算ができる。	○ 10の補数に着目して、加数を分解してたす考え方ができる。	○ 繰り上がりのある計算に興味をもち、「10の補数」という考えのよさに気づき、進んで計算しようとする。

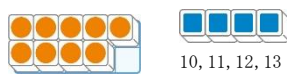
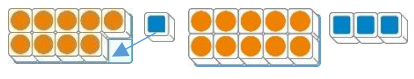
## 5 指導計画(全9時間)

次(時)	学習活動	評価規準
1次 (4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「車が9台止まっています。4台来ると何台になりますか。」の式を立て、計算の仕方を数図ブロックを用いて考える。</li> <li>・10をつくることのよさがわかり、<math>9+5</math>や<math>9+7</math>の計算を数図ブロックを使って考える。(本時)</li> </ul>	答えが10をこえることに気づき、数図ブロックを操作して10のまとまりをつくって計算しようとしている。《発言・ノート》(態) ブロック操作を通して、繰り上がりのあるたし算ができる。 《ノート》(知・技)
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<math>7+4</math>の計算を、数図ブロックを用いて考え、計算の仕方を説明する。</li> <li>・<math>6+7</math>の計算を、声に出して行う。</li> </ul>	被加数を分解して、繰り上がりのある(1位数)+(1位数)のたし算の仕方を考えたり説明したりしている。 《発言・観察》(思・判・表)
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<math>9+\square</math>, <math>8+\square</math>, <math>7+\square</math>, <math>6+\square</math>の計算をする。</li> <li>・「赤い花が7つ、黄色い花が5つ咲いています。合わせていくつ咲いていますか。」の式を立てて、答えを求める。</li> </ul>	加数分解によるたし算の仕方を理解し、計算できる。 《ノート》(知・技)
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「おにぎりが赤い箱に4個、青い箱に8個入っています。合わせて何個ありますか。」の式を立てて、答えを求める。</li> <li>・<math>5+\square</math>, <math>4+\square</math>, <math>3+\square</math>, <math>2+\square</math>の計算練習をする。</li> </ul>	被加数や加数に対する10の補数に着目すれば良いことに気づいている。 《発言・ノート》(思・判・表)
2次 (4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「たしざんのかあど」を使って、繰り返したし算の練習をする。</li> <li>・答えが11のカードに数図ブロックを置く。</li> <li>・教科書巻末の「かあどげえむ」を行う。</li> </ul>	繰り上がりのある(1位数)+(1位数)のたし算が確実にできる。 《観察・ノート》(知・技)
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「たしざんのかあど」を使って、答えが同じになるカードを集める。</li> <li>・並べたカードを見て、気がついたことをいう。</li> </ul>	答えが同じたし算カードを並べるのに、順序よく整理しようとしたり、きまりを見いだそうとしたりしている。 《発言・観察》(態)
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・既習事項の復習をする。</li> </ul>	10の補数を意識して、加数を分解してたすことができる。 《ノート》(知・技)

6 本時の学習 (1/9)

指導者 1年3組 武富 朱里

- (1) 主眼  
(1位数) + (1位数) で繰り上がりのあるたし算について、数図ブロックの操作を通して、10の補数を利用した計算方法を見いだすことができる。
- (2) 準備 【教】数図ブロック、数図ブロック盤、掲示用の絵  
【児】数図ブロック、数図ブロック盤
- (3) 展開

	学習活動・内容	○指導上の留意点 ●対話の手立て (評) 評価
導 入	1 フラッシュカードで復習する。 2 情景図と問題文から題意をとらえ、学習課題をたてる。 ・立式 「9 + 4」 ・たしざんになる理由 「くる」→「ふえる」	○ 既習事項を確認することで、本時の学習につなげる。 ○ 情景図を掲示し、絵を見てわかることを話し合うことで駐車している車と駐車場に入ってきた車の2量があることを確認する。 ○ 問題文より「くる」という言葉が「ふえる」と同義であることをとらえることで、文章から式をつくることができるようにする。 ○ 答えが10以上、10+いくつでは解決できないことに気づかせる。
展 開	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-bottom: 10px;"> <b>【Q1】 9 + 4は どうやって けいさんしたらいいかな。</b> </div> 3 9 + 4の計算の仕方を数図ブロックを使って考える。 ・数図ブロックの操作 ・1こずつ動かして数えたす。  9, 10, 11, 12, 13 と数えたす。 ・10のまとまりをつくって、10と3で13。 	○ 必要なブロックが用意できているか、確認する。 ○ 被加数をオレンジ、加数を青のブロックで用意させることで、視覚的に10の被加数を意識できるようにする。 ● 指で数えたしをしている児童には、視覚的に10のまとまりに気づきやすいブロック操作をするように声かけをする。(教) (評) 数図ブロックを使って自分の計算の仕方を考えようとする。 ≪操作・ノート≫ (態)
終 末	4 計算の仕方について話し合う。 ・自分の考えの発表 1 隣同士 2 全体 5 学習のまとめをする。 ・よさ <div style="border: 1px solid green; padding: 10px; margin-top: 20px;">                         9と1で10                          10と3で13                     </div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-bottom: 10px;"> <b>【Q2】 どうやってけいさんすると 早く めんたん せいかくに こたえがでるかな。</b> </div> ○ ペア学習を取り入れることで、どの児童にも説明の機会を確保する。 ● 口頭だけでなく、数図ブロックを操作しながら自分の考えを説明するように促す。(友) ● 隣同士で自分の考えを伝え合わせる。その際に、自分と同じ操作の仕方や違う操作の仕方がないか意識しながら聞くように促す。(友) ○ 数図ブロックを動かしながら発表させ、どれも答えは11になっていることを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-top: 10px;"> <b>【Q2】 どうやってけいさんすると 早く めんたん せいかくに こたえがでるかな。</b> </div> ○ 「10より おおきい かず」の学習を想起させ、10の補数を利用した計算方法のよさに気づかせる。 ○ 10のまとまりを作ることがより早く・簡単・正確に答えを導き出せることに着目させる。 (評) 答えが10をこえることに気づき、数図ブロックを操作して10のまとまりをつくって計算しようとしている。 ≪発言・ノート≫ (態) ○ 計算の仕方を繰り返し唱えさせ定着を図る。
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-bottom: 10px;"> <b>10のまとまりをつくる。</b> </div> 6 練習問題を行う。 ・数図ブロックの操作 7 振り返りを行う。 ・わたがしチェック	● 本時の学習を振り返り、数図ブロックを使って10のかたまりをつくってから計算するよう指導する。(教) (評) ブロック操作を通して、繰り上がりのあるたし算ができる。 ≪操作・発言≫ (知・技) ○ わたがしチェックをし、理解度を確認する。

## 考察

### 1. 成果

#### (1) 「視点1 『問い』の観点から」

情景図があることで、答えが10より大きい数になり、既習事項との違いに気付くことができた。また、数図ブロックを使い考えることで、全児童が自分の考えをもつことができた。

よりよい方法を選択する視点として「はやく かんたん せいかくに」を与えることで、10のまとまりをつくることの大切さに気付かせることができた。

#### (2) 「視点2 『対話』の観点から」

操作活動の時間を十分取ることで、一人ひとりが教材と向き合うことができた。また、ペア学習を取り入れることで、自信をもって自分の考えを全体に発表することができた。ペアでの学習や、全体での発表を聞き、友だちの考えと比較することで、ほとんどの児童が10のまとまりをつくることの大切さ、考えやすさについて気付くことができた。



### 2. 課題

#### (1) 「視点1 『問い』の観点から」

導入部分で既習事項との“ズレ”を与えたが、そのズレが少なかったため、解決の意欲に繋がりにくかった。もっと大きな“ズレ”を与えることで、児童が自力解決しようとする意欲がさらに生まれたのではないかと考える。

#### (2) 「視点2 『対話』の観点から」

5と5で10のまとまりをつくる練習はしていたが、本時で初めて「一列で10のまとまり」に触れたので、一目で10のまとまりかどうかを把握できていない児童がいた。数図ブロック盤で横に10のまとまりをつくる練習をしておく必要があったと考える。

「9と1で10。10と3で13」という言葉を反復練習し、10のまとまりをつくることの大切さをもっとおさえる必要があったと考える。おさえが弱かったため、練習問題でも、自分の考え方（10のまとまりをつくる以外）を使って答えを求める児童もいた。



# 中学年 实践・考察

# 10月21日（水） 第4学年1組 外国語活動学習指導案

## 1 単元 What do you want? ほしいものは何かな

### 2 単元の目標

- ・食材の言い方や、欲しいものを尋ねたり要求したりする表現に慣れ親しむ。
- ・欲しい食材などを尋ねたり要求したりするとともに、考えたメニューを紹介し合う。
- ・相手に配慮しながら、自分のオリジナルメニューを紹介しようとする。

### 3 単元の構想

○ 本学級の児童は、あいさつ、遊び、曜日、時間などを英語で言ったり尋ねたりする学習を積み重ねてきた。身に付けてきた表現を使って、コミュニケーションを図る体験を繰り返し、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しんできた。しかし、獲得した表現を使って、友達の前で進んで発表することに対しては、自信が持てずに消極的になることが多い。また、一方向のやりとりにとどまることが多く、実際の会話場面よりも広がりを感じられない。

本単元の学習を通して、何往復かのやりとりを経験し、言葉で通じ合うことの楽しさを感じながら、児童自らが進んでコミュニケーションが楽しめるようにしていきたい。

○ 本単元は、学習指導要領第3学年及び第4学年の内容

[知識及び技能]

(1) 英語の特徴等に関する事項

ア 言語を用いて主体的にコミュニケーションを図ることの楽しさや大切さを知ること

[思考力、判断力、表現力等]

(2) 「情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項」

ア 自分のことや身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を使って、相手に配慮しながら、伝え合うこと。

イ 身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどが伝わるよう、工夫して質問したり質問に答えたりすること

を受けて設定した。

本単元は、児童にとって身近な野菜やフルーツの英語での言い方を知り、市場で欲しい物を尋ねたり要求したりする活動を通して、慣れ親しんだ語彙や表現を使ってコミュニケーションを図るとともに相手に配慮しながら自分のオリジナルメニューを紹介することをねらいとしている。そのねらいを達成するために、「オリジナルパフェやオリジナルサラダを作ろう」という場を設定する。児童が“What do you want?”や、“I want ～, please.” “How many?” “Here you are.” “Thank you.”などの表現を使って、自分の伝えたいことを話したり、相手の言いたいことを理解したりする活動を楽しみながら行うことで豊かな関わりが育まれると考える。また、このような手立てを行うことで、これからの国際社会を生き抜く児童が意欲的に英語に触れ、慣れ親しむことができるようにしたい。このように、本単元は自分が言いたい

ことを自信をもって英語で表現できるように体験的な学習が設定され、積極的にコミュニケーションを図ることのできる有意義な学習であると考えます。

また、何往復かのやりとりを経験することで、言葉で通じ合うことの楽しさを十分に感じさせることができ、答え方をフレーズではなく文表現としたことで、5年生以降での教科学習においての文構造への気づきにつながっていくことが期待される。

○ そこで、指導にあたっては、以下の点に留意する。

- ・導入では世界の市場を視聴させ、日本の市場との相違点や共通点を見つけさせ、意見の交流を図ることで世界の食文化に対する興味関心を深めさせる。
- ・オリジナルパフェやサラダを考える活動を通して、欲しい食材の言い方や、欲しいものを尋ねたり要求したりする表現に慣れさせるようにする。
- ・担任と ALT がデモンストレーションを行うことで、児童におおよその内容を推測させ、単元のゴールイメージをもたせる。また、相手に対して配慮する伝え方を考えさせる。
- ・ALTに指導者とのやりとりの相手役や正確な発音の手本となってもらうことで、児童が見通しを持ち安心して取り組めるようにする。
- ・まず隣の相手に伝えて練習し、その後ペアをかえて活動させることで会話の質を高め十分な練習量を確保できるようにする。また、よかったペアを紹介し評価することで、目指す全体像を共有する。
- ・終末には、会話の3ポイントや、対話する時に気を付けたことなどを振り返る時間を取ることで、充実感や達成感を持たせたい。

#### 4 評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
聞くこと	食材の言い方、 What do you want? I want～. How many? Here you are. などの表現を聞くことに慣れ親しんでいる。	日本の市場と比べながら、世界の市場の様子についての話を聞いて、世界には様々な食材があることを知るとともに自分たちと同じ食べ物も食材になっていることが分かっている。	世界の食文化に対する理解を深め、友だちが話しやすいように気をつけながら、進んで英語で話されることを聞こうとしている。
話すこと やりとり	食材の言い方について What do you want? I want～. How many? Here you are. などを用いて、話すことに慣れ親しんでいる。	オリジナルパフェやサラダについて相手に伝わるように工夫しながら話している。	オリジナルパフェやサラダについて相手に伝わるように工夫しながら、いろいろな食材について話そうとしている。



## 6 指導計画（全5時間）

時	目標と主な活動 (◆目標)	評価規準
1	<p>◆オリジナルパフェやサラダを作るため、外国の市場の様子を知り、日本の市場と比べながら相違点や共通点に気づく。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・テキストを見て知っている食材を発表し、その食材の言い方を知る。</li> <li>・世界の市場の様子を視聴し日本の様子と比べて気づいたことを発表する。</li> </ul>	<p>○オリジナルサラダを作る参考にするために世界の市場の様子を聞き、意味が分かっている。</p> <p>[思] 聞くこと]</p>
2	<p>◆オリジナルパフェやサラダを作るために、欲しいものを尋ねたり、要求したりする表現に慣れ親しむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導者とALTとのやりとりを見たり、真似をしたりしてお店とのやりとりの仕方を知る。</li> </ul>	<p>○食材やお店とのやりとりなど</p> <p>What do you want? I want～ How many? Here you are.</p> <p>を用いて話している。</p> <p>[主] 話すこと] [主] 聞くこと]</p>
3	<p>◆フルーツパフェについて欲しいものを尋ねたり要求したりして、自分の作ったパフェを紹介する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・登場人物が自分のフルーツパフェの中身を紹介するのを聞き線で結ぶ。(教科書)</li> <li>・ペアになりやりとりをしてパフェを作る。</li> </ul>	<p>○フルーツパフェについて伝え合っている。</p> <p>○欲しいものを尋ねたり要求したりして伝え合っている。</p> <p>[知] 話すこと] [知] 聞くこと]</p>
4 本時	<p>◆オリジナルサラダに使いたい食材について、欲しいものを尋ねたり答えたりして伝え合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・だれのためにどんなサラダを作るかを考え、やりとりをして食材を集め、オリジナルサラダを作る。</li> </ul>	<p>○食材について欲しいものを相手に配慮しながら、工夫して尋ねたり答えたりして伝え合っている。</p> <p>[思] 話すこと]</p>
5	<p>◆相手に伝わるように工夫しながら、オリジナルサラダについて紹介する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前時に作成したオリジナルサラダを紹介する。</li> </ul>	<p>○相手に配慮しながら自分のオリジナルサラダを紹介している。</p> <p>[主] 話すこと・聞くこと]</p>

### ○言語材料

What do you want?

I want～ (potatoes) ,please.

How many? (Two) please

Here you are. Thank you.

果物・野菜・飲食物 vegetable, potato, cabbage, corn, cherry, sausage

### ○既出

What' s this? It' s(a fruit). Do you have(a pen)?

Do you like(blue)? Yes,I do. No, I don' t.

I have (a pen). I don' t have (a pen).

果物・野菜・飲食物 数

7 本時の学習 (4 / 5)

指導者 1組 古市 佑介

- (1) 主眼 使いたい食材について欲しいものを尋ねたり答えたりする活動を通して、お互いが気持ちよく会話することができる。
- (2) 準備 児童用テキスト, 教師用シート (野菜・果物), 電子黒板, 振り返りシート
- (3) 展開

	学習活動・内容	T1 指導上の留意点	T2 ALTの動き
導 入	1 ウォーミングアップをする。 ・挨拶 How are you? ・スモールトーク What's the date today? What day is it today? How's the weather?	○絵シートを示すことで、進んで英語表現できるようにする。 ○気持ちについて挙手で意思表示させることで、全員が参加できるようにする。	・教師や児童とやりとりをする。
	2 学習課題をつかむ。 ・教師とALTによるデモンストレーション  ・単語の練習 ・Let's chant (What do you want?)	○会話のやり取りを見せることで、学習の見通しが持てるようにする。 ●不適切な会話の例を見せることで、コミュニケーションで大切なポイントに気付くことができるようにする。(教) ○必要な単語やフレーズを復習することで、やりとりをする際の表現がスムーズにできるようする。	・教師とデモンストレーションをする。 (早口で、言葉が足りない言い方で、お手本の言い方で) ・チャンツを歌う。
展 開	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p><b>【Q1】</b> どのようにやりとりすると、おたがいが気持ちよく買い物できるだろうか。</p> </div>		
	3 オリジナルサラダを作る。 ・オリジナルサラダを考える。 ・会話の3ポイント Eye contact, Smile, Clear voice (目を見て笑顔ではっきりした声で) ・ペアでのやりとり 店側・・・What do you want? How many? Here you are. 客側・・・~, please. I want ~. Thank you.	○だれのためにどんなサラダを作るのかを考えさせることで、意欲的に取り組むことができるようにする。 ●会話の3ポイントを示すことで、相手を意識したコミュニケーションをすることができるようにする。(教) ●ペアで会話の練習をさせることで、十分な練習量を確保し、自信を持って会話することができるようにする。(友) ●必要なフレーズを板書に示すことで、視覚で確認しながら話すことができるようにする。(教) ●尋ねる側(店側)と答える側(客側)に分けて、時間を区切って練習することで、フレーズを習得できるようにする。(友)	・児童にアドバイスする。  ・会話の3ポイントについて確認する。  ・児童と活動する。
終 末	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p><b>【Q2】</b> 友達のよいところを紹介しましょう。</p> </div>		
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>●ペアの組み合わせを変えることで、アドバイスし合いながら試行錯誤し、会話の質を高めることができるようにする。(友) (評) 食材について欲しいものを尋ねたり答えたりして伝え合っている。 [思 話すこと]</p> </div>		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p><b>【Q3】</b> お互いに気持ちよく買い物するために、今日がんばったことを書きましょう。</p> </div>			
	4 学習をまとめ、振り返りを行う。 ・会話の3ポイント ・対話する時に気を付けたこと	○いくつかのペアに発表させることで、本時の学びを振り返ることができるようにする。 ○視点を与えて振り返りを書かせることで、本時での学びの意義が実感できるようにする。	

## 考察

### 1. 成果

#### (1) 「視点1 『問い』の観点から」

相手に対して配慮する伝え方を児童に意識させることができるめあて設定ができた。また、ALT とのデモンストレーションを行うことで、児童は学習の見通しを持つことができた。また、不適切な会話の例を見せることで、コミュニケーションで大切なポイントに気付かせることができ、意欲的な取り組みにつながった。

#### (2) 「視点2 『対話』の観点から」

導入の挨拶やスモールトークを教師と一緒にいたり、簡単なクラスルームイングリッシュを使ったりすることで、英語に慣れ親しむ雰囲気を作り出すことで、会話で気をつける3ポイント「eye contact」「clear voice」「smile」に気付くことができた。また、机間指導を行い、会話の3ポイントが守れている児童を賞賛することで、注意する所を意識しながら取り組むことができた。さらに、終末でいくつかのペアに発表させることで、本時の学びを振り返り、本時での活動を価値付けることができた。

### 2. 課題

#### (1) 「視点1 『問い』の観点から」の観点から

ALT との不適切な例を見せてから、めあてを提示するのではなく、めあてを提示した後に児童に会話のポイントを考えさせると、児童の目的意識を明確にさせることができた。活動の中で、課題を少しずつ解決できるように、児童の思考の流れを大切に、授業作りに取り組む。また、問いに対する評価についても、児童同士の対話の中で気付きを持てるように、自己評価や相互評価の時間の取り方を工夫するとよかった。

#### (2) 「視点2 『対話』の観点から」の観点から

ワークシートを1枚にしたり、活動時に赤白帽子で役割を明確にしたりして対話に集中できる環境作りをすると、学習を通してより高まりを感じられたかもしれない。また、活動の途中で自己評価を取り入れたり、気付きを伝え合ったりすることで、会話の質を高めながら意欲的に取り組むことができたかもしれない。



# 高学年 实践・考察

## 第5学年3組 算数科学習指導案

日 時 令和3年1月27日(水) 5校時

指導者 岩国市立愛宕小学校 竹内 愛菜

### 1 単元 15 割合のグラフ 『わくわく算数5』(啓林館)

### 2 単元の目標

- 割合のグラフについて、帯グラフや円グラフを用いた分類・整理の仕方を理解し、それをもとに事象の特徴を考えたり説明したりすることを通して、統計的に問題解決する力を育むとともにその方法を生活や学習に活用しようとする態度を養う。

### 3 単元の構想

- 本学級の児童は、学んだことを家庭学習で振り返ったり、納得がいかないところは素直に質問するなど「できるようになりたい。」という思いをもっている児童が多い。しかし、「正解している自信がない」という理由で全体での発表をためらう児童も少なくない。

割合については、「割合の意味」、「全体と部分の割合」、「くらべる量の求め方」、「もとにする量の求め方や百分率」について学習しているが割合の考えが十分に定着しておらず、苦手としている児童が多い。また社会科で工業生産や輸出入のグラフなど割合を表すグラフの読み取りを行う際には、割合と実際の量を混同して捉える様子が見られる。

- 本単元は、小学校学習指導要領算数編第5学年の内容D「データの活用」(1)に示された目的に応じてデータを集めて分類整理し、データの特徴や傾向に着目し、問題を解決するために適切なグラフを選択して判断し、その結論について多面的に捉えて考察することをねらいとしている。グラフは、いろいろな授業や場面で見慣れているため、学習に対する意欲や関心は比較的高いと思われるが、割合や計算を苦手としている児童が多いため、割合の計算について丁寧に確認したり、計算の負担を減らしたりしながら授業を行う必要があると考える。また、本単元で学習する必要な情報を選択し、読み取ったり表現したりすることは、学級活動や委員会活動などをはじめ日々の生活場面でも活かせるものである。

- そこで、指導にあたっては、以下の点に留意する。
  - ・複数のグラフから情報を適切に読み取る場面では、「消費エネルギー量の割合」や「消費エネルギーの総量」「電力消費量」など児童にとって理解の難しい語彙がでてくるため、言葉の意味を全体で確認し、それぞれのグラフが何を表しているかを読み取ることができるようにする。
  - ・「消費エネルギー量」と「消費エネルギー量の割合」の意味の違いが理解できないことが予想されるため、「2005年度の家庭の電力消費量の割合は、2015年度より少ない」「2005年度の家庭の電力消費量は、2015年度より少ない。」の2つの文を提示し、意味の違いを考えさせることによって理解させる。
  - ・円グラフや帯グラフの読み方とその特徴について指導する際に、割合を振り返らせることで、割合の計算によるつまづきを減らす。
  - ・一人一台の電卓を配布し、計算の負担を減らし、問題を解決する意欲を高める。

- ・単元の終わりでは、各児童が興味をもったことについて学級でアンケート調査を行い、実際に割合のグラフを用いたポスターを作成させることで、実生活で活用する力を育てる。

### 視点1 「問い」との関わり

- ・「2005年度の家庭の電力消費量の割合は、2015年度より少ない」「2005年度の家庭の電力消費量は、2015年度より少ない。」の2つの文を提示し「電力消費量の割合」と「電力消費量」の違いに気付かせることで、児童に「どのグラフのどの数値を使えば電力量が分かるのだろう。」という問いを持たせる。(Q1)
- ・適用問題では、複数のグラフを組み合わせて考える必要のない問題や組み合わせても解決出来ない問題に取り組ませることで、情報を正しく読み取るには目的に応じた適切なグラフが必要であることに気付かせ、問いを深める。(Q2)
- ・まとめを書かせる際に、「どのようにすればグラフから多くの情報を読み取れるのだろうか。」と児童に問いかけることによって学んだ内容を振り返らせる。(Q3)

### 視点2 「対話」との関わり

- ・一人で問題と向き合う時間では、大切だと思う数字に印をつけるように声をかけ、情報を正しく読み取るためにどの数値を見れば良いかが視覚的に分かりやすくさせる。(教)
- ・苦手意識を持つ児童が話し合い活動に参加しやすい環境や、自分の意見を発表しやすい雰囲気を作るために、全体で意見を交流する前に班の友達の考えを聞いたり、班の友達に考えを話したりさせる。(友)
- ・授業を通して分かったことや気づいたことをノートに書かせることで、自分自身の成長に気づかせる。(自)

#### 4 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○帯グラフや円グラフについて理解し、帯グラフや円グラフを用いて資料を整理することができる。また、統計的な問題解決の方法を理解することができる。	○帯グラフや円グラフをもとに適切に判断したり、集めた資料を整理するのに適切なグラフを選択したりすることができる。 ○得られた結論について多面的に考えることができる。	○帯グラフや円グラフのよさや統計的な問題解決の方法を知り、身のまわりの事柄などを調べるときにそれをいかそうとする。

#### 5 指導計画（全6時間）

次 (時数)	学習活動	評価規準
1次 (3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>都道府県別のみかんのしゅうかく量を割合で表す</li> <li>割合を使う場合は、帯グラフと円グラフで表すことができることを知り、帯グラフと円グラフを読み取ることでそのよさに気づく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>今までであったグラフから、割合を表すためには帯グラフや円グラフが良いと判断し、そのよさをノートに書いたり、発表したりすることで表現しようとしている。(思・判・表)</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>帯グラフや円グラフのかき方を知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>割合(%)を求め、帯グラフや円グラフにかき表すことができる。(知・技)</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>複数のグラフから情報を適切に読み取る。(本時)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>必要なグラフを選択し、読み取った情報をもとに正誤を判断している。(思・判・表)</li> </ul>
2次 (2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>データを集めて整理し、割合のグラフを作成する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>課題意識をもって、一連の統計的な問題解決の方法について深く知ろうとしている。(主)</li> </ul>
3次 (1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>適用問題を解くことによって学習内容の理解を確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>帯グラフの意味を理解し、全体と部分の関係や部分と部分の関係をよみとることができる。(知・技)</li> <li>統計グラフの特徴を理解し、適切なグラフを判断することができる。(知・技)</li> </ul>

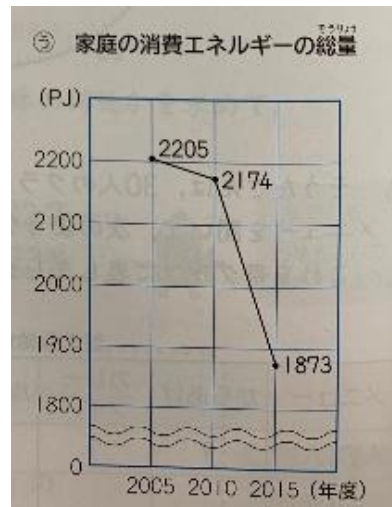
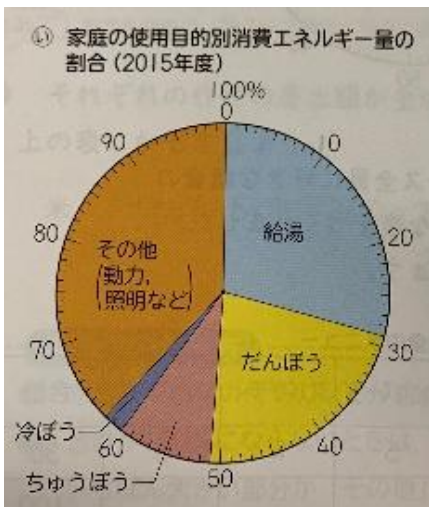
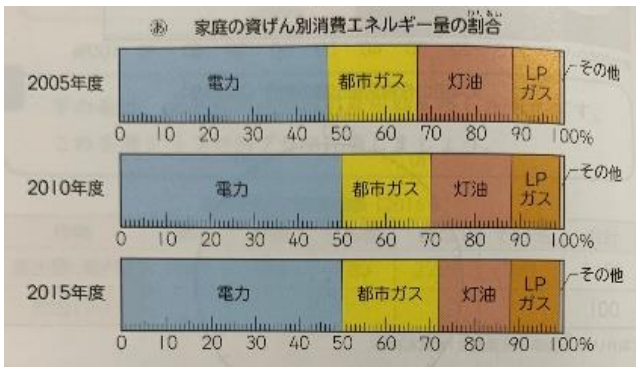
## 6 本時の学習 (3/6)

- (1) 主眼 正誤を判断することを通して、複数のグラフから必要なグラフを選択し、読み取った情報をもとに問題を解決することができる。(思・判・表)
- (2) 準備 ㉞ ㉟ ㊱ のグラフ (掲示用), 電卓 (児童数分)
- (3) 展開

	学習活動・内容	○指導上の留意点 ●対話の手立て(評)評価
導 入	1 各グラフがそれぞれどんなグラフで何を表しているのかを話し合う ・グラフの特徴	○話しあったことを全体で共有させ、板書に残すことによりグラフが表している事柄を共通理解させる。 ○児童に正誤を判断する問題を解くことと、「正しい」「正しくない」「この資料からは分からない」の3択で答えることができることを知らせ、学習の見通しをもたせる。 ○「電力消費量」と「電力消費量の割合」の違いを理解させるために、「2005年度の家庭の電力消費量の割合は、2015年度より少ない」「2005年度の家庭の電力消費量は、2015年度より少ない。」の2つの文を提示する。またその違いから児童に問いを持たせる。
	2 正誤を判断する問題に取り組む  2005年度の家庭の電力消費量の割合は、2015年度より少ない。  2005年度の家庭の電力消費量は、2015年度より少ない。  ・「電力消費量」と「電力消費量の割合」の違い	
展 開	3 グラフから分かることを基にして、電力消費量の求め方を考える ・複数のグラフから必要な情報を選択し、読み取ること	○児童の計算の負担を減らすために、一人一台電卓を使用させる。 ○㉞と㊱のグラフに注目して考えることを共通理解させるために、教師から児童に「どのグラフをみればよいか。」と投げかける。 ●どこを見れば良いかが視覚的に分かりやすくなるように、大切だと思う数字に丸をつけさせることで、数値に注目させる。(教) ●全体の場で自信をもって意見を述べられるように、班で考えを交流させる。(友)
	4 適用問題を解く  2015年度の家庭の消費エネルギーの総量は、2010年の約86%である。  2015年度の家庭の灯油消費量の29%が、給湯に使われた。  ・目的に応じたグラフの選択	
終 末	5 まとめ、ふりかえり  ・複数のグラフを組み合わせる。 ・計算する。 ・グラフのタイトルに注目する	○数値だけではなく、グラフのタイトルにも注目することの大切さに気付かせる。 (評)必要なグラフを選択し、読み取った情報をもとに正誤の判断をしている。(思・判・表)  【Q1】どのグラフのどの数値を使えば電力量が分かるのだろう。  【Q2】同じように読み取って考えるとよいか。  ●正誤を判断するために情報を正しく読み取るには、目的に応じた適切なグラフが必要であることに気づかせるために、組み合わせる必要がない問題や組み合わせても解決できない問題に取り組ませる。(教)  【Q3】どのようにすればグラフから多くの情報を読み取れるのだろうか。  ●振り返りをノートに記述させることで、授業前後での自身の変化に気づかせ、今後どのように活かしていきたいかを考えさせる。(自)



参考資料



## 考察

### 1. 成果

#### (1) 「視点1 『問い』の観点から」

「2005年度の家庭の電力消費量の割合は、2015年度より少ない」「2005年度の家庭の電力消費量は、2015年度より少ない。」の2つの文を提示し「電力消費量の割合」と「電力消費量」の違いに気付かせることで、児童に「どのグラフのどの数値を使えば電力量が分かるのだろう。」という疑問を持たせ、「無理、無理」「わからん」などの児童の素直な言葉を引き出すことができた。

#### (2) 「視点2 『対話』の観点から」

大切だと思う数字に印をつけるように声をかけ、情報を正しく読み取るためにどの数値を見れば良いかが視覚的に分かりやすくさせたことにより、自分と教材との対話が活性化した。

生活班での話し合いの場面で、教師が班や児童に対して言葉がけを行うことによって対話するきっかけをつくることができた。さらに「まとめ」で大切な学習事項を全体で共有したため、自分の言葉で学んだ内容を振り返る児童の姿が見られた。

### 2. 課題

#### (1) 「視点1 『問い』の観点から」

「電力消費量の割合」と「電力消費量」の違いから疑問を持たせ、「無理、無理」「わからん」などの児童の素直な言葉を引き出すことができたが、学習としての問いにすることができなかった。教師が児童の素直な言葉に耳を傾け、全体に共有することが大切だと感じた。

#### (2) 「視点2 『対話』の観点から」

本授業の一番の課題は、導入に時間をかけすぎたことにより、児童が十分に教材や友達と対話する時間を設けることができなかった点であると考え。

全体で意見を交流する前に班の友達の考えを聞いたり、班の友達に考えを話したりすることにより、苦手意識をもつ児童も学習に参加できたと思うが、実際に意見を発表したのは学級の一部の児童だけであった。今年度は、対話によって苦手な児童も学習に参加できる環境をつくることや、自分の考えを全体の場で自信を持って表現できることをねらったが、来年度以降は学びを深める対話についても研究を進める必要があると感じた。

## おわりに

今年度は、来年度の小中一貫研究事業を受けて各学年で教材開発・授業研究に取り組みました。研究主題を「主体的に学びに向かう児童を育む授業改善～『問い』と『対話』を重視した授業づくりを通して～」とし、そのために「問い」と「対話」という2つの視点から授業改善に取り組みました

低学年部の1年算数科では、情景図を使って既習事項との違いに気付かせたり、数図ブロックを用いて児童が自分の考えをもつことができるようにしたりしました。また、操作活動やペア学習を通して教材との対話や友達との対話を行うこともできました。

中学年部の4年外国語活動では、ALTとのデモンストレーションにより児童が学習の見通しをもつことができました。また、不適切な会話を例示することで課題意識や意欲をもたせることができました。そして、ペア学習による内容の紹介を通して、本時のふり返りが行えるように仕組みました。

高学年部の5年算数科では、グラフから読み取れることの違いに気付かせることによって、問いをもつことができるようにしました。また、班での対話や全体での共有の時間を取ることで、児童が自分の言葉でふり返りを行うこともできました。

今年度は、3本の授業の内、1本を小中一貫研究授業1年次の発表として市内の学校へ公開いたしました。また、一緒に研究を進める川下中学校、川下小学校の公開授業へも多くの教職員が参加し、研修を深めることができました。今後は、3校での実践のそれぞれのよさを取り入れ、小中一貫教育の中での本校の研究をさらに深めながら来年度の発表に向けて、教職員が丸となって取り組んでまいりたいと思います。

終わりにになりましたが、研究を進めるにあたり、格別のご指導を賜りました関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、今後一層のご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

### 令和2年度 研究同人

原田 剛	西富 顕	橋本由紀子	瀬田 浩子	宮本 紘子
武富 朱里	南 靖子	田村由香里	杉山 由紀子	重岡 知宏
西本 秀樹	古市 佑介	岩間 有希	黒杭 雅江	三木 将太
石田 哲也	竹内 愛菜	奥田 直美	森川 剛	古屋 寛樹
伊藤 淳美	田村 菊夫	長谷 陽葉	梶川 明子	河村 孝行
鷺 明日美	長畑 七重	恩田 安由美	安吉 尚之	野坂 リエ
村上 尚乃	沖廣 公子	猪俣 有紀	林 有希	齊藤 美結

